

資料紹介

オスマン・エルギン著 『トルコにおける都市運営の歴史的発展』(2)

Osman Ergin, “Türkiyede Şehirciliğin Tarihi İnkişafı”: An Annotated Translation, (2)

(翻訳) 川本 智史
KAWAMOTO Satoshi

東京外国語大学世界言語社会教育センター
Tokyo University of Foreign Studies, World Language and Society Education Centre

(翻訳) 守田 まどか
MORITA Madoka

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
Tokyo University of Foreign Studies, The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

キーワード

オスマン帝国 都市 オスマン・エルギン イスタンブル 近代市政

Keywords

The Ottoman Empire; City; Osman Ergin; Istanbul; Modern Municipal Administration

原稿受理日: 2023.12.17.

Quadrante, No.26 (2024), pp.233–249.

目次

1. 資料解題にかえて
2. 資料訳文

1. 資料解題にかえて

本稿は、1936年に出版されたオスマン・ヌーリー・エルギンの講演録『トルコにおける都市運営の歴史的発展 *Türkiyede Şehirciliğin Tarihi İnkişafı*』¹に註訳したものである。すでに『*Quadrante*』25号において²、最初の10分の1程度を註訳しており、本稿はその続きである14頁から34頁(第1部第1項の終わり)までを註訳したものである。筆者の経歴や本書の構成については前稿をご参照いただきたい。

本稿での内容は「個人」の寄進によって生み出されたテツケ(修道場)や無料宿泊所、病院などの都市施設に関するものであり、オスマン朝都市社会におけるその重要性を強調している。またオスマン帝国末期からトルコ共和国初期にかけての代表的な思想家ズィヤ・ギョカルプの雑誌論文が頻繁に引用されており、エルギンならびに当時の知識人たちが彼の思想から強い影響を受けていた、あるいはそれを強く意識していたことがうかがわれる。

2. 資料訳文

これについてももう少し補足しましょう。

我々トルコ人は、サンジャク・シェリーフ(神

¹ Osman Ergin, *Türkiyede Şehirciliğin Tarihi İnkişafı* (Istanbul: Cumhuriyet Gazete ve Matbaası, 1936).

² 川本智史、守田まどか訳注「資料紹介 オスマン・エルギン著『トルコにおける都市運営の歴史的発展』」『*Quadrante*』25、2023、325-338頁。



聖な旗)と呼ばれる、ただの白い布にほかならない歴史的遺物に、何世紀にもわたって価値を与え、敬意を示してきたようです。この旗をいつ掲げようとも、7歳から70歳までのすべてのムスリムはその旗の下に集まり、ジハード、すなわち戦争に行くことが(宗教的)義務であるという信念を持ってきたようであります。さらに、最近では、このようにして一度もどの場所から取り出されてトプカプ宮殿の上奏の間(アルズ・オダス)の向いの門³の前に立てられ、そこへ誰も足を踏み入れることがないように、1908年の(青年トルコ人)革命に至るまで、銃剣を持った二人の兵士が番をさせられていたのです。立憲革命の後、番兵は廃止されましたが、その記憶をとどめるために、そこに石がおかれました。トプカプ宮殿の訪問客はこの石を、(上奏の間の向いの)門の前でまだ見ることができます。

この種の我々の信念のひとつに、カリフによる聖戦の宣言があります。カリフが聖戦を宣言すると、すべてのイスラーム世界は戦争へ駆けつけるのだと考えられていました。(第一次)世界大戦ではこうしたことも目の当たりにしました。ファトワーが発表され、聖戦が宣言されたのです。ところが、イスラーム世界は微動だにしなかったのです。

こうして見ると、このような信仰というものは、時々生まれ、長い期間または短い期間続き、やがて絶えるのです。いかなるものにも、いかなるときにも、永遠の命は与えられていないのです。つまりテッケの信仰もこのようなものなのです⁴。

二番目の反対は社会学者からくるでしょう。

彼らの言い分ももっともであると認めましょう。今申し上げたことが、私が社会学者たちと同じ考えであることを示すとしても、やはりこの重要なテーマについて、二つの側面それぞれに光を当てるために、トルコの大思想家ズィヤ・ギョカルプの言葉を引用しましょう⁵。

「判断というものは、事実判断と価値判断の二つに分かれる。事実判断とは、物質的特質から生じる性質を物体に帰するもので、「砂糖は甘い、硫酸塩は苦い、火は燃える」という場合、これらの我々の判断はそれぞれひとつの事実判断である。というのは、甘さは砂糖の、苦さは硫酸塩の、可燃性は火の物質的特質において実在しているからだ。「これは神聖だ、良い、あるいは美しい」という場合、これらの我々の判断はそれぞれ価値判断である。一部の理論家によれば、(これらの特質も)事実判断のように物体の物質的特質から生じているために、価値判断も事実判断のように物体の物質的特質を示すのである。しかしながら、多くの場合、ある物体の物質的特質とその物体に与えられた価値の間にいかなる関係も存在していない。例えば、カーバ神殿の黒石はイスラームにおいては非常に神聖な石である。預言者ムハンマドの聖遺物は非常に神聖であるとみなされる高貴な遺物である。しかし、これらの神聖さは、カーバ神殿の黒石あるいは預言者ムハンマドの聖遺物の物質的価値からきているのであろうか。疑いなく、そうではないのである。

祖国の国旗も非常に高貴で、非常に尊厳あるものだ。戦争で旗が敵の手に落ちないように、何千もの兵士たちが命を犠牲にしたことは、数多く見られてきた。しかし旗は、一本の竿に

³ 至福門 (Bab-ı Sa'ade) のこと。

⁴ この前段でエルギンが論じているように、1925年9月にトルコ共和国政府はテッケと聖者廟の閉鎖を命じている。

⁵ 以下の引用は次からのものである。Ziya Gökalp, "Felsefeye Doğru," *Küçük Mecmua*, 6 (1340/1922): 1-6. 『小雑誌 *Küçük Mecmua*』については後述。なおズィヤ・ギョカルプは1876年にトルコ南東部のディヤルバクルに生まれ、1924年に亡くなった人物で、政治活動家・教育者。トルコ民族や近代化に関する考察を深めて、その思想はナショナリストたちに大きな影響を与えた。次の代表作は日本語への翻訳が進められている。小笠原弘幸ほか訳「【原典翻訳】ズィヤ・ギョカルプ著『トルコ化、イスラム化、近代化』翻訳(上)』『史淵』159、2022、pp. 119-145。

掛けられた色付きの布からできている。疑いなく、旗に大変な価値があることは、物質的特質から生じているのではない。人間は、生命体であるという観点では動物と同じである。ところが、道端で動物の死体があったとき、単にその場所の清潔さという観点のみが着目される。一方、人間の死体に出くわしたならば、道徳的な悲痛から、そこには人々が群集し、激情が生じる。つまり、人間に付与された価値というのは、単に物質としての生命体のためではない。一枚の郵便切手が、ときには大きな富をもたらしえる。ダイヤモンドと真珠、毛皮とレースの価値を流行の波によって変えてしまうものもやはり、まったく疑いなく、これらの物質的特質ではないのである。

この説明からわかるように、価値というものは世俗の利害を超える、超越的な存在である。ここでわかることは、人間の最も重視する「理性的」な経験則は、ただ事実判断においてのみ支配的なものであり、価値判断において支配的なのは私たちの感受性であり、これを「精神」という。偉大なるフランスの哲学者パスカルが言ったように、「精神」には第二の知性があり、理性はそれに影響されない⁶。精神は宗教的、道徳的、美的価値を理解する。そこからは恍惚を得る。この恍惚感とともに、幸せに過ごせるのである。一方の理性は、価値を物質的な枠組みへと押し込もうとする。理性はこれがうまくいかないと、理性と精神の間はかなり激しい葛藤が始まる。この葛藤は、次の3つの状態のいずれかに行き着く。

第一に、理性は精神に対して勝利して、抑圧的にそれを支配する。その時、この理性の持ち

主は、唯物論者のようにすべての価値を否定する。あるいは第二に、精神は理性に打ち勝って高圧的にそれを支配する。その時、この精神の持ち主は、神秘主義者のように合理性に全く重要性を認めない。あるいは第三に、理性と精神が、共通の観点を見つけ出して双方折り合いをつけ、両者ともまったく譲歩や犠牲を払うことなく、充足した総体システムを実現させる。この時、このシステムの持ち主は「哲人」になった、と私たちはいう。」

ズィヤ・ギョカルプによるこの説明によれば、この種の言説や批判は哲人の耳を持って聞く必要があります。そうすれば反対の余地もなくなります。

弓術家のような、いわばスポーツ選手たちが屋根の下に集う、オクメイダヌ⁷にあるテッケや、広い広場で力士たちがレスリングをする、ゼイレキ⁸の「力士のテッケ」は、それぞれその当時のスポーツ、娯楽、鍛錬クラブのようなものではなかったでしょうか。

大砲、鉄砲、短銃、爆弾のような武器が現れた後、弓矢の価値やそれへの敬意は失われ、弓術もかつての名声を失いましたが、国民的スポーツとして弓術は40～50年前まで需要がありました。さらに「弓術家のテッケ」は第一次世界大戦末まで存在していました。今日テッケの建物は取り壊され、ミナレットだけが残っています。テッケが運営されていたときには、「セマーの家」⁹とよばれるホールには何百もの弓と矢が壁につるされて、あたかも今日のトプカプ宮殿博物館の展示室のように、ひとつの博物館のようでした。

ムアッリム・M・ジェヴデト¹⁰が、最後の弓術

⁶ 「幾何学的精神 esprit de géométrie」と「繊細の精神 esprit de finesse」の違いを意味するものと思われる。

⁷ イstanbulのヨーロッパ側北郊にある地区。

⁸ イstanbulのヨーロッパ側歴史半島部分にある地区。

⁹ メヴレヴィー教団においては旋回舞踏「セマー」がおこなわれる部屋。

¹⁰ Muallim M. Cevdet (1883-1935). 教育、歴史叙述およびオスマン語文書の整理分類に携わった。セルビアからボルへの移住者の家庭に生まれ、祖父はテッケの長老だった。高等師範学校(Dârülmualimîn-i 'Âliye)卒業後さまざまな学校で教鞭を執り、パリ滞在中にはデュルケームやベルクソンにも学んだ。Ahmet Güner Sayar, "Muallim Cevdet," *Türkiye*

家の長老アフメト・エフェンディから聞いたとして伝えるところによると、オクメイダヌにあった弓術家のテッケは、毎年5月6日のフズル・イリヤスの日¹¹に開かれていました。6ヶ月間訓練がおこなわれたものでした。テッケには総長の地位にあたる「弓術家の長老」以外に、今日では審判とよばれる「ハヴァジュ」がおり、彼らは練習をする者たちの試験をおこない、新人たちを激励していました。勝利者の名前は歴史として伝えられ、石に刻まれました。イスタンブールの大きなスポーツ広場で、広大なスタジアムとも言えるオクメイダヌで見ることのできる石碑は、この(歴史の)証人なのです。詩人たちが勝利した弓術家たちのために詠んだ韻文や顕彰文は、この石の上に書かれています。勝利者たちには別に賞金も与えられました。今日のグラウンドあるいはスタジアムが、選手たちの健康を守り、球が風の影響で的を外さないように窪地の奥まった、周りが木々で覆われた場所に建てられる必要があるように、弓術家たちのグラウンドも、同じ要領で高燥の、四方からの風の具合のよい場所にあることが条件です。すると弓術家のためにオクメイダヌが選ばれた理由はこれなのです。

ヨーロッパではただ現代的な鍛錬だけではなく、弓術のような伝統的なスポーツでも数千もの若い選手がおります。私たちの新世代の間では、この種の鍛錬への情熱はまったく広がっていません。ギリシアでさえ、3000年前の鍛錬が完全に復活したのに、です。

ここで公平に考えてみましょう。この「弓術家のテッケ」のテッケ性や宗教施設としての性質はどこにあるのでしょうか。

再び M・ジェヴデトによる深い考察から学ぶことができます。弓術家たちの自宅には「ヤー・

ハック(ああ神よ)」の扁額がなければいけません。競技中に弓が地面に落ちると一斉に「ああ神よ」と叫ばれたものでした。今日のスポーツでもいろいろな叫び声があるではありませんか。弓術家たちは、自分が用いる道具や用具にそれぞれ敬意を払い、沐浴をせずには矢を放ちませんでした。そして先達たちを偲び称えることなしには、つとめが終わったことにはなりません。今日のスポーツクラブでも、鍛錬中におこなわれる似たような方法、習慣、形式があるではありませんか。体を洗わず水も使わない、あるいはクラブの会長や連盟に敬意を払わず白眼視するようなスポーツ選手はいらぬのでしょうか。弓術家たち、つまり昔のスポーツ選手たちの自宅にある「ああ神よ」の扁額に対応するように、今日のスポーツクラブや、その選手たちすべての襟にはそれぞれ記章があるではありませんか。

続いて「力士のテッケ」についてです。ゼイレキ(地区)にあるヴォイヌク・シュジャアッディン・モスクの隣にあったことを私たちが歴史資料や記録から知っているこの施設は、不幸にも「弓術家のテッケ」ほどには存続せず、150年前に取り壊されました。その場所にはかつて大きな菜園がありました。この菜園は最近になって正教会総主教座の手に渡り、イスタンブール(ビザンツ帝国)の最後の皇帝コンスタンティン13世がトルコ人たちによって殺害された場所であるかのようにこじつけられ、菜園の井戸は聖なる泉(アヤズマ)とされたのでした。この聖なる泉が生み出す収益によって、ヤンヤ(現ギリシア共和国のイオアンニナ)の正教徒たちの大規模な学校が運営されていたのでした。イスタンブールの最初のカーディーで最初の市長を務めた、ナスレッディーン・ホジャの末裔に

Diyanet Vakfî İslâm Ansiklopedisi, vol. 26 (Ankara: Türkiye Diyanet Vakfı, 2005), 311-313. エルギンはジェヴデトと親交が深く、その死後ジェヴデトの業績や著述をまとめた。Osman Nuri Ergin, *Muallim M. Cevdet'in hayatı, eserleri ve kütüphanesi* (İstanbul: İstanbul Belediyesi, 1937).

¹¹ 東方正教の聖ゲオルギウスの日に相当する祭日。

あたるフズル・ベイ¹²と、トルコ人のなかでは最初の書誌学者チャーティブ・チェレビ¹³は、このテッケの隣に埋葬されています。歴史の観点からも、またこれらの人物が眠っているという理由からも、このテッケの場所を、トルコの若い世代が忘れないようにしなければいけません。

今日、いかなるスポーツクラブや協会に入会しようとも、まず登録費といって幾分かのお金を払った後、毎月あるいは毎年、一定の定められた会費を支払う必要があることは皆知っているとあります。我々の祖先が開設したスポーツクラブへの入会には、このような支払いの義務はなかったのです。それどころか、多くの場合、儀式や宗教儀礼の日には、無料で食事すら提供されていたのです。

こうした組織や、こうした金のかからない生活様式が、人々を働かなくさせ、怠惰へと導いたことは疑いのないところでもあります。しかし、我々に強力な社会改良家が現れていたとしたら、宗教よりも世俗に属するこれらの活動団体を近代化することはできたに違いありません。

このテーマについて話を続けるうえで、これらの活動団体についてムアッリム・M・ジェヴデトが非常によく分析した以下の言葉を想起しないわけにはいかないでしょう。ジェヴデトがいうには、

「最近のその退廃した様子を見て、テッケが

常にそのようだったと決めつけるべきではない。四季のうち秋だけを見て、春にもあたりが葉っぱも緑もないと考えるのは正しくないように、それらが完全だった時代には、テッケは魂を非常に鍛錬するものであった。テッケは昔、文学や音楽、歴史のゆりかごだった。人生の苦しみを和らげることを必要としている者は、そこへ駆けつけたのである。美しい調べのせせらぎのもとで、魂を浄化したのだ。慰めの言葉や歴史的説話を聞いて、ふたたび生き生きとしたのだった。要するに、テッケは、悲観や喪失感で命を絶とうとする人々が、ふたたび元通りになれる場所だった。最も健全なるトルコ語の息吹は、テッケ文学から生まれたのだった。とりわけ、アナトリアとバルカンの魂を唄うサズ¹⁴の達人たちは必ずテッケに所属していたのである¹⁵。」

各々が各自の方法で魂に糧を与え、さらには直接的に魂に語りかけるテッケについて、その他の種類を考慮に入れたり説明したりする必要はないでしょう。思うに、すべてのテッケの目的は宗教的というよりも、むしろ世俗的だったのです。しかしながら、それらは役立てられえなかったのです。

この種の活動団体が宗教的であることよりもむしろ世俗的であったことを証明するのが、「癩者たちのテッケ」であります¹⁶。

¹² Hızır Bey (1407?-1459). アナトリア西部のスイヴリヒサルのカディーの子として生まれる。母親がナスレッデーイン・ホジャの末裔とされるがこれは疑わしい。各地のマドラサで教授職やカディー職を歴任した後、エルギンの伝える通り、イスタンブール最初のカディーとなった。Musfata Said Yazıcıoğlu, "Hızır Bey," *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol.17 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 1998), 413-415.

¹³ Kâtib Çelebi (1609-1657). オスマン朝の文人にして大博物学者。書誌学、地理学、歴史学など諸分野の著作を残した。Orhan Şaik Gökyay, "Kâtib Çelebi," *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 25 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 2002), 36-40.

¹⁴ サズは東地中海地域からイランにかけて使用される弦楽器で、大きさに応じてバーラマヤジュラとも分類される。一般的に3組の複弦(高音部から2弦、2弦、3弦のセット)を持つ。アーシュクとよばれるアレヴィー派の吟遊詩人が用いることが多く、現在でもトルコ民族音楽を代表する楽器である。

¹⁵ 出典は不明である。

¹⁶ 詳細については次を参照。Nuran Yıldırım, "Miskinler Tekkesi," *TDV İslâm Ansiklopedisi*, vol. 30 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 2005), 185-186. 近代トルコの小説家レシャト・ヌーリ・ギュンテキンはこの施設についての小説を記した。Reşat Nuri Güntekin, *Miskinler Tekkesi* (İstanbul: İnkılap Kitabevi, 1946). なお「miskinler」にはハンセン病患者のほか、「怠け者」との意味もある。本稿では miskin に癩者、cüzzamlı にハンセン病患者の訳語をあてる。ここでは今日は差別的であるため用いられない「癩者たち」という表現を用いるが、これは歴史的な文脈に照らし合わせてのものであることをここに付記しておく。

ウスキュダルのカラジャ・アフメト墓地の端、バーダート通りに面して、「癩者たちのテッケ」なるものがあります。1927年まで、建物も残っていました。今日は四方の壁だけが残っていますが、写真や絵画、図面が存在し、保管されています。これについては、(イスタンブル)大学の医学史教授スヘイル・ウンヴェルによる学術研究があります¹⁷。ここは、ハンセン病患者のために設立された施設です。しかし、これすら、名前はテッケなのです。この施設の設立目的は、当時、伝染性の病気と考えられ、治療薬が見つかっていなかったハンセン病患者を隔離すること、指が落ちた手や、鼻がちぎれた顔、働かない彼らの怠惰な生活を、人目から遠ざけること、といったように、医学的、社会的、人道的、さらには文明的なものであります。

アナトリア、バルカン、アラビア半島の方々に旅行したエヴリヤ・チェレビは、ほぼすべての都市にはその周縁に、これらの人々のためのテッケあるいは居住区がひとつずつあったと伝えています。エディルネやブルサ、スィヴァスといった諸都市においては、それぞれひとつずつ、幾分大きな癩者たちの施設があったことがわかっています。

ウスキュダルの建物には20の部屋とひとつの浴室、ひとつのモスクがあり、すべての部屋には暖炉がありました。癩者たちは家族と一緒にここで暮らし、一家族は二部屋を使っていま

した。

このテッケに言及する歴史家たちの一部は、『諸モスクの花園』の作者アイヴァンサライーのように¹⁸、癩者たち、つまりハンセン病患者たちの中から選ばれたシェイフがいたこと、そして彼ら自身によればいろいろなしきたりがあったことを書いておられますれば、エスナフのトップに立つ者でさえその当時には「シェイフ」と呼ばれたことに鑑みれば、彼らのシェイフもこのような者ということになりましょう。普通の信仰儀礼すらおこなえず、礼拝もできないハンセン病患者たちが教団の一連の節制生活や信仰儀礼をおこなった可能性はないでしょう。

エヴリヤ・チェレビはハンセン病患者たちとテッケについてこのように言及しています。

「公道に面した市外のテッケである。すべての癩者たちはそこに居住しお供え物で暮らしている。市内で癩者の報告があると直ちに有無もいわずテッケに連れてくるのである。アーヤーンであろうと名士であろうと全く容赦はしない¹⁹。」

癩者たちの暮らしのために、ワクフが割り当てられていたと共に、人々からの多くのお供えや施しがありました。人々は癩者と接触せずに施しを与えるために、テッケの入り口のそばに一メートルほどの高さで、てっぺんにくぼみのある7～8本の石柱を立てました²⁰。お金はこのくぼみに置かれ、患者たちはやってきてそれを取ったのでした。

¹⁷ 後にスヘイル・ウンヴェルはこの図面を著書『医学史』の中で公開した。Süheyl Ünver, *Tıbbî Tarih: Tarihten Evvelki Zamanlardan İslâm Tababetine ve İslâm Tababetinden XX. Asra Kadar* (İstanbul: İstanbul Üniversitesi, 1938), 257.

¹⁸ アイヴァンサライー(?-1787)は18世紀の文人で、イスタンブルのモスクやテッケの縁起を網羅的に記録した大著『諸モスクの花園 *Hadikatü'l-cevâmi'*』を残した。本作品にはラテン文字による転写および英語訳が存在する。「癩者たちのテッケ」は「デデたちのテッケ *Dedeler tekkesi*」として登場し、該当箇所は次の通り。Ayvansarâyî Hüseyin Efendi, Ali Sâti' Efendi, Süleymân Besîm Efendi (prep. By Ahmed Neziî Galitekin), *Hadikatü'l-Cevâmi'* (İstanbul *Câmileri ve Diğer Dinî-Sivil Mi'mârî Yapıları* (İstanbul: İşaret Yayınları, 2001), 654-656. Howard Crane (ed. & tr.), *The Garden of the Mosques – Hafiz Hüseyin al-Ayvansarayî's Guide to the Muslim Monuments of Ottoman İstanbul* (Leiden, Boston & Köln: Brill, 2000), 540-542.

¹⁹ Evliya Çelebi, *Evliya Çelebi Seyahatnâmesi: Topkapı Sarayı Bağdat 304 Yazmasının Transkripsiyonu - Dizini, 1. Kitap: İstanbul*, ed. Orhan Şaik Gökyay (İstanbul: Yapı Kredi Yayınları, 1996), 234.

²⁰ 「施しの石 *sadaka taşı*」のこと。現存しないこの石柱の写真は次を参照。M. Zeki Palalı, “cüzzam,” *TDV İslâm Ansiklopedisi*, vol. 8 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 1993), 152.

この解説が示しますように、ここは治療はおこなわれなかったため病院とはとても言えませんが、少なくとも「救貧院」でした。もっと正確に言えば「隔離施設」です。でも到底テッケとは（言えません）！

このような場所にテッケの名と装いを与え、業務を管轄する者をシェイフとよび、この方法で宗教的で来世的な性格を与えることは、民衆の慈悲と同情の感情をくすぐるためでした。さもなくばここでの宗教儀礼と節制生活の意味はないわけじゃないですか。じゃあテッケということにしておきましょうよ、ということです。

もうひとつ別の件に移りましょう。

今日、外国人や非ムスリム集団から影響を受けない中央政府、地方自治体、ワクフや特殊団体²¹、あるいは大学のような五つの所管元が人々から集める税金で設立し運営しようと努力している、しかしどうにも喫緊のニーズには答えられていない病院や他の社会保障組織は、昔は完全に「個人」が設立し、この種の組織にはビーマールハーネ (bîmârhâne) という名が与えられていました。

民族や宗教の隔てなくすべての人はこの衛生・社会施設に受け入れられ、知識と手技に優れていればどの宗教や民族の者であれ医師として任命され、市場に肉がなければ狩りをして肉を得て病人に食べさせ、病人たちをサズ (saz) とことば (söz) で楽しませ、あるいは別の言い方をすれば音楽で治療を施したことは、7～8世紀前の世界でいかなる民にも先駆けてトルコ人が実現したことをワクフ文書から驚きを持って理解しますし、

週の決まった日には外来や在宅で治療を求め人々にこの施設から無料で薬が処方されたことを知っております。

ただトルコ人やトルコというのだけではなく、世界でも最も偉大な旅行家であるエヴリヤ・チェレビが彼の時代から250年前に（つくられた）エディルネにあるバヤズィト病院を訪れた時のことを作品に記した様子、情報、考察などをお読みになれば、国民感情のさらなる高揚を感じられることでしょう²²。おすすめします。

イスタンブル大学の医学史教授スヘイル・ウンヴェル博士の長年おこなわれた考究が、『ディリム (Dilim)』という名の医学雑誌の今月初めに出版された号に掲載されましたが²³、これを見ると西暦15世紀以来現在まで、近年とりわけタンズィマート以降に中央政府や地方自治体、ワクフによって創設されたいくつかの施設を例外としますれば、イスタンブルには49のビーマールハーネが作られたことがわかります。これをささいな尽力と言えますでしょうか。

「ビーマール」とは病気を意味しますので、この施設は現代の表現で病院のことです。近年にはこの施設はまったく放置されてしまっていましたので、ただ家では看護されることの難しい知的・精神病患者たちの収容場所になり、ビーマールという語句も人口に膾炙すると「ティーマール」となって「ティーマールハーネ」すなわち瘋癲病院という名になってしまいました。軍人病院の看護師たちが今でも「ティーマールジュ」と呼ばれるのは、この時代とこの施設の名残なのです。

²¹ Hususi idare. この団体の詳細については、以前に訳出済みの箇所を参照。川本智史、守田まどか訳注「資料紹介 オスマン・エルギン著『トルコにおける都市運営の歴史的発展』Quadrante (25)、2023、333頁。

²² バヤズィト2世がエディルネ郊外に16世紀初頭に建設した病院施設のこと。精神病患者らに対して音楽療法などをおこなっていたことで知られる。Evlîya Çelebi, *Evlîya Çelebi Seyahatnâmesi: Topkapı Sarayı Bağdat 304 Yazmasının Transkripsiyonu - Dizini*, 3. Kitap: İstanbul, ed. Seyit Ali Kahraman, Yücel Dağl. (İstanbul: Yapı Kredi Yayınları, 1999), 263-264.

²³ 『ディリム』誌はイスタンブル大学医学部が刊行する学術雑誌。しかし講演がおこなわれた時期の前後の号ではウンヴェルの論文は確認できない。

スヘイル・ウンヴェル博士は、セルジューク朝とオスマン朝によって8～10世紀に渡って、イスタンブルおよびアナトリアとバルカンに建設されたこの種の保健施設の図面や写真、運営方法を示した分厚い研究を準備し、まずはブカレストで開催された国際医学学会で、のちにはマドリードでの開催時に発表して高く評価されました。これを喜ばしく思いますし、その研究が一刻も早く出版され、私たちも参照できるようになることを願うのみです。

軍人病院を除く、今日のイスタンブルにある病院について、1932年の統計にもとづいて作

管轄	病床数	病院数
中央政府	1600	7
地方自治体	1800	6
ワクフ	250	1
非ムスリム	1420	4
外国人	779	11
私立	242	8
	6091	37

成された次の表を、比較のために読み上げておきましょう。

別の話題に移りましょう。

D

都市に住む貧しい人々、あるいは外から都市にやってきた貧しいよそ者たちを、落ち着き先が見つかるまで保護し、仕事が見つかるまで飲み食いさせることは、今日わたしたちが地方自治体に期待する事柄です。これには疑いの余地がありません。しかしここで残念ながら申

し上げておかなければいけないのは、トルコの地方自治体のうち比較的にもっとも豊かなイスタンブル市でさえも、これを行えるような状況ではなく、たったひとつの施設、たったひとつの部屋さえないのです。救貧院 (Darülaceze)²⁴、あるいは今日の言い方では困窮者寮 (yoksullar yurdu) をすぐに思い浮かべてはいけません。建設と開設における意図や目的は異なります。そこはよそ者のためではなく、イスタンブル出身の人々と、母国を離れて難民という形でイスタンブルに来て定着した人々に特化しているのです。

しかしながら、個人の尽力と企画が評価され必要とされた古い時代には、この種の事柄に対処するため、「タブハーネ taphane」と呼ばれる施設がイスタンブルだけで20もありました。大きな金曜モスクの隣には、必ずと言っていいほど、タブハーネがあったのです。イスタンブルに来た一文無しの旅人、よそ者たち、貧しい者たちはここで寝起きし、すぐそばにある給食所では無料でお腹を満たしたのです。みなさんがすぐに見ることができるバヤズイトのタブハーネは、バヤズイト・モスクの両側にある翼廊です。このことはエヴリヤ・チェレビの記述からわかります。この建物は、後にモスクとの間にあった壁が取り壊されて、モスクの拡張部分になりました²⁵。

「ターブ Tâb」という言葉はペルシア語で力や強さを意味しますので²⁶、理由はともあれ空腹で力がなくなって衰弱した人々は、これらの施設で飲み食いし力を得たのです。さらに、

²⁴ 1896年イスタンブルに創設された救貧院。Hidayet Yavuz Nuhoglu, "Darülaceze," *TDV İslâm Ansiklopedisi*, vol. 8 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 1993), 512-514.

²⁵ 礼拝室に付属する翼廊部分は14～16世紀初頭に建造されたモスクに多く見られるものである。「ザーヴィイエ」あるいは「イマーレト」とよばれたこれらの宗教施設は、市民が金曜礼拝に集う集会モスク「ジャーミィ」とは本来機能や名称を異にしていたが、日本語や英語ではひとくりにモスクとよばれる。政府高官らが寄進した礼拝堂には通常タブハーネが併設しており、ごく例外的に君主が寄進したものにも併設された。エルギンが根拠としているのはおそらくエヴリヤ・チェレビであり、もともと2棟のタブハーネが別棟であったこと、そして17世紀半ばまでには間仕切り壁が撤去されて空間が接合されたと伝えている。Evliya Çelebi, 1996: 67. Semavi Eyice, "Beyazıt II Camii ve Külliyesi," *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 6 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 1992), 47-48.

²⁶ トルコ語ではターブの語末の子音 b の音が無声化されて p となる。さらに長母音を短母音に置き換えた上で、ここに「家」を意味するハーネをつけて「タブハーネ」という語を造語するのである。

エヴリヤ・チェレビがこれらの施設をタヴハーネ (tavhane) とも言っていることを考慮すると、(貧者たちはこれらの施設で飲み食いして) 肥えていった (tavlanmak) のだと言えましょう。

タブハーネに類似するものとして、「ハーヌ・セビル han-ı sebil (慈悲の宿)」もありました。慈悲の宿については、ウスキュダルのバラバン埠頭に、四方を壁で囲まれた敷地があることを私たちは見知っているのみです²⁷。長い旅路を経てイスタンブルに渡る金がなくなってしまった人々、あるいはイスタンブルからアナトリアに行く貧しい旅人たちは、ここに神のお慈悲によって (fi sebil illâh)、つまりただで泊まって(ただで同行させてくれる) 隊商の到着を待ったのでした。これらの施設を「無料ホテル」と言えましょう。

また別の話題に移りましょう。

E

二三年前、イスタンブル市役所はそこで働く公務員だけにではなく、無料ではないものの一般の食堂に比べれば廉価で食事を提供する「公務員食堂」を開設し、また慈善団体のひとつである赤新月協会も小学校の欠食児童の一部に対して、恒常的ではなく冬の時期のみに、不定期に一日一回無料で一杯の温かいスープを提供したことを新聞で私たちは読んでおります。そして私たちはみなこの企画を賞賛しています。第一次世界大戦中にやはり赤新月協会が「食堂」といって開設した施設で、毎日何百人もの貧しい人々、寡婦、父や母のない子供たち、軍人の家族に食事を提供したことを、未だに感謝をもって記憶しております。ですが、次のようにも見られています。この種の慈善は、ただ困難な時期に、あるいは決まったわずかな

人たちのためにのみなされていると。しかしながら、かつては誰であれ、そして何人であろうとも、すべての望む人々には一日一度のみならず、二度のたっぷりとした食事を提供した、「イマーレト imaret」とよばれる施設はイスタンブルだけで20軒あったのでした。食堂あるいは食事を提供する場所を意味するこの施設に、なぜ「イマーレト (栄えた地)」という名が与えられ、どのようにして始まり、どのように退廃したかは少し後に説明します。

これら施設において、一日で少なくとも四五千人が食事をしていました。この合計にマドラサの学生も付け加えれば、数字はさらに膨らむことがわかります。大衆に無料で食事を振る舞う施設の数を誇張されていると思われることは、皆様の表情からうかがえます。しかし、次のことを思い起こす必要があります。この大学だけでも、300メートル圏内にはこのような施設が5つあり、残りの15という数はこの巨大なイスタンブルにとってみれば誇張された数字ではないことを皆さん確信されるかと思えます。まずそのうちのひとつがすぐその窓から見えます。目の前のベヤズイトにあり、もうひとつが皆様の背後のスレイマニエに、三番目がシェフザーデに、四番目がラーレリに、五番目はヌールオスマニエにあることをお知らせしますので、ここからお帰りの際には場所と建物を自らの目でごらんになられることを請け合いますし、新旧の制度のあいだの比較を容易にするものでしょう。

ベヤズイト・イマーレトの場所には、今日国民図書館があります。ここの大きなサロンには、今では読書机と椅子がありますが、ここにはかつて食卓と腰掛けがありました。スレイマニエ・イマーレトの一部は現在トルコ・イスラ

²⁷ 「山羊毛の織物隊商宿 Muhtab hanı」ともよばれる。長らく税関として機能し、イスタンブルへの家畜送り出し拠点ともなっていた。Süleyman Faruk Göncüoğlu, “Üsküdar Hanları,” in *Uluslararası Üsküdar Sempozyumu VII -2-4 Kasım 2012, 1352'den bugüne şehir*, vol.1, ed. Süleyman Faruk Göncüoğlu (İstanbul: Üsküdar Belediyesi Kültür ve Sosyal İşler Müdürlüğü, 2014), 642.

ム博物館に、別の部分は碑文博物館になっています。イスラーム博物館の廊下には、イマーレトの水車石が今でも置かれています。ヌールオスマニエ・イマーレトの場所には陶器工場が開設されました。シェフザーデ・イマーレトの建物は現在ワクフ局の倉庫です。唯一ラレリ・イマーレトのみ昔の状況を保っていて、かつてのように貧しい人々に食事を作り提供しています。このような一例がユスキュダルにもあります。

このようにイマーレトもすべて個人の尽力、個人的な制度の産物です。現在では放棄された建物でさえ、有用なかたちで利用されています。

第一次世界大戦中には、まちの多くの場所で食事が作られ、地区の貧しく困窮した人々、軍人家族に配られたという大変な尽力のことが思い起こされれば、再びこのような世界的厄災の時になれば利用されるために、残されたイマーレトが取り壊されることなく、そっくり保存される必要はないのでしょうか。他の用途に用いられたとしても、かまどや他のものは壊されない方がよいでしょう。

また別の話題に移りましょう。

F

今日の市役所に期待される衛生的な墓地、近代的なトイレ(化粧室)、公園や公共庭園といったように、人々の健康に資するのと同じ具合に都市の美化にも貢献していた諸組織もまた、すべて個人的尽力と私的貢献によってもたらされたことを、ここで繰り返すまでもないでしょう。

そうです、例外なくトルコのあらゆる都市のあちこち、それどころかそのもっともいい場所を占めている墓地はみな、個人が死者たちに無料で割り当てた場所なのです。法令によって墓地がワクフから接収されて市役所の管轄に

移ったとき、市役所はそれらの墓地のどれに手を付けようとも、地権証や証文をもって誰かが現れてしまったのでした。墓地が個人(の尽力)によってつくられたものだけということについて、他の証拠を示す必要はないでしょう。さらには、財務記録では農地となっているこれらの墓地の所有者が税を払っていたということも驚きでした。なんとここは、人間が植えられた畑だったようなのです! 哀れな市役所はここでもまた失望を味わったのでした。共和国政府が(新しい)法令によってこの問題を解決することに疑いの余地はありません。

まだ話の続きがあります。四季を通して緑を湛えると同時に、墓地の悪臭を消す大きな糸杉の木々も、みな個人によってそこに植えられたのでした。かつては、公共の墓地にもそれぞれ種苗場がありました。死者が埋葬されると、その頭の方に糸杉の若木を一本植えるのが慣例慣行となっていたのです。なんと素晴らしい、なんと衛生的で、文明的な尽力であり貢献ではありませんか。

今日、「樹木祭り」という名を与えられ、中央政府と市政組織が協力し、さらには学校の児童も取り込んで実施されている植樹、つまり樹を植える政策をどれほど賞賛したとしても、昔の人々が行っていたこの慣習と貢献も同じように驚きと賞賛をもって記念することは、私たちにあって文明かつ衛生上の責務とならなければなりません。

とりわけ、かつてイスタンブルにその数が1400を超えたとみられる、すべて個人の尽力によって建設された礼拝所のそばには、同じ数だけの公衆便所、新しい言い方では化粧室が作られたことを私たちは見知っています。

200年前イスタンブルに来たフランス人旅行家は、トルコ人がこの問題を重視して取り組んでいることを驚嘆と賞賛をもって書物に記し、当時のフランスでは宮殿や劇場ですら公衆便

所や、特にたっぷりの水を使ってきれいにするシステムがないことについて遺憾とともに追記しています²⁸。今日私たちは汚れたものを見て、「モスクの便所のよう」と蔑みますが、なんと昔の公衆便所はフランス人旅行家の垂涎の的だったのです！

こうした衛生に関する奉仕と尽力に、都市のあちこちで今なお存在する、人々が散歩したり、新鮮な空気を吸ったり、楽しんだりするために開放された屋外の礼拝所や緑地、小さな森といった公共の遊歩場を付け加えると、古い時代において公園や公共の庭園などが、中央政府や市役所によってではなく、人々によってつくられていたことがわかります。ヴェリ・エフェンディとチュルプチュの緑地、パシヤバフチェとブユクデレの緑地や林はみな、この種のものです。

また別の話題に移ります。

G

ここで列挙したのとは別に個人は、思い起こされず想像もできないような、多くの市行政的あるいは衛生上の事業も引き受けていました。これを数多くの事例と共に立証することも可能です。しかし話をはしよるために、大変興味深く思われるひとつのものだけをお話ししましょう。

たとえば、今日地面につばを吐くことは、公安通達で禁止されているとともに、家族の中では家庭で、あるいは教師によって学校で、少なくとも子供たちにはこれがよくないことであることが、いろいろな理由と共に教えられています。結核撲滅委員会のような法的機関もまた、論文、パンフレット、学術会議で、また衛生博物館もさまざまなパネル展示を用いて、民衆にこの悪習をやめさせるように努めていることを知っ

ております。加えて、市役所がごく最近になって多くの場所で、通りに敷く敷石の上に「つばはき禁止」をいう文字が書かれていることまで私たちは見知っています。

ことば、忠告、あるいは処罰で脅すことでもってしても、この悪習を妨げることが困難であることを理解した昔のトルコ人たちは、お金を割り当てて、人員を任命し、彼らを背中にひとつずつ灰が入った容器をもたせて通りを巡回させ、どこかで唾や痰を見かければその上にいくらかの灰をかけて、つまり実用的な手段で害を押さえ、目に入る汚れと不快さを取り除くことに取り組んでいました。灰にはある程度消毒効果があることは当時でも理解され、これを実用面に用いたことを、私は十分にお伝えし得ないでおります。ことほどさように、この汚いものを上から覆うことでおこなわれた衛生的、さらには美観上、究極的には行政上の業務の偉大さを存分にお話しすることができぬ我が無能をも、皆様の前に告白いたします。

また別の話題に移ります。

H

お金が、経済、社会、そして宗教的事柄で果たした役割を、昔のトルコ人は、協同組合や、各種の会社、そして銀行という名前が聞かれなかった時代でも評価して、「アヴァールズ銀貨²⁹」といわれる、共同基金と低廉な利率の融資組織を実現させていました。

かつては、人々がその周りに集まったり、近くに住んでいる礼拝所、あるいは各街区には「アヴァールズ銀貨基金」がありました。この基金の資本は、政府や市役所ではなく、返還されたり物質的な利益が全く得られない形で、個人が供出しました。供出された資金はシャリーアの

²⁸ このフランス人旅行者が誰であるかについては不明。

²⁹ 街区ごとに課される戦時の臨時税に備えて各街区で設定されたワクフ。Özer Ergenç, "Osmanlı Şehrindeki 'Mahalle'nin İşlev ve Nitelikleri üzerine," *Osmanlı Araştırmaları* 4 (1984), 76-78.

脱法³⁰によって運用されて、利殖の一部は街区の事業や礼拝所の運営費に充て、一部は街区の貧者、寡婦、困窮者、孤児や身寄りのない者たちの支援に用いられました。

今日、ある程度このような事業を管轄する赤新月社や、児童保護協会、またダーリュッシュェファカ(無料寄宿学校)³¹を運営するトルコ教育協会のような、片手で数えることのできない支援協会に匹敵するものがかつて各街区にはあって、つまりアヴァールズ銀貨基金がひとつずつ各街区にあったことは、父祖の大いなる憐憫と支援の気持ちを示しているという点で賞賛に値するではありませんか。

トルコでは1285年(西暦1869年)にはじめて、ワクフからこの業務が移管されて市役所に与えられました。これはこの年に発布された条例から知られます。するとこれは、狂信が極限にまで達したこの当時において、宗教的組織や運営として認められていたワクフの利息や金銭貸し付け事業が、宗教や宗教的組織と折り合いがつけられないという考えによって生じたのでしょうか。さりとて、この当時においてまた、ワクフが孤児たちの資金をシャリーアに抵触しない方法でしっかりと貸し付け・運用しており、これは頭にターバンを巻いた(宗教的な)導師たちがおこなっていたのです。これは精査するに値する問題です。なぜならワクフが管轄していた業務のいかなるものも、理由なしに勝手に市役所に移管されることはないからです。とりわけ、この当時においては、です。

そしてまたこの時期、すべての職業協会(エスナーフ)にはそれぞれ援助基金がありました。商工業をさらに発展させたいと願う街区住民には街区のアヴァールズ基金からの融資よりも低廉な利率で融資が行われ、このようなかた

ちで実態としては「エスナーフ銀行」のような経済的援助が行われていたのです。

1930年の地方自治体法の発布後にアンカラで開設され、中央政府と法令の効力によってトルコの地方自治体の収入の5パーセントを資本金として確保していた自治体銀行と、エスナーフ銀行のような個人による利他的な企画とを比較検討することは、敬愛すべき聴者の皆さんに託したいと思います。

ただし、これだけは申し上げておきましょう。すなわち、自治体銀行は自らの出資額に応じて資金を得たいとする地方自治体に対してすら、それを利子付きで貸しているのです。考えてみれば、今日この他の方法での融資があり得ないので、銀行を責め立てるべきではないでしょう。

さて皆さんはお気づきになったでしょうか？先ほど、私の口から「シャリーアの脱法」という用語が出ました。シャリーアと脱法の間に関連があるのかと皆さんはおっしゃるでしょう。ごもっともです。説明いたしましょう。ついでにここで少し触れておきたいのは、利子というものを宗教や政治体制がどのように見做し、どのように実践していたかということです。長々とした解説はここでは触れません。これについては専門家たちによる多くの賛否があります。今日、低廉であれば利子の必要性を認めない人はいない、といった感じです。これについてのイスラームの考え方もこのようだと主張し弁護する人々にも事欠きません。

私がここで申し上げたいのは、以下のことです。イスラームは利子を禁じたにもかかわらず、たった今申し上げたように、多くの人々が慈善や善行のために寄進したお金は、利子付きでモスクのような宗教施設を運営した

³⁰ Hile-i şer'iyye.

³¹ ムスリムの孤児のために、1873年にイスラーム教育協会(Cem'iyet-i Tedrisiyye-i İslâmiyye)がイスタンブルで開設した初等学校。Halis Ayhan and Hakkı Maviş, "Dârüşşafaka", *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 9 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 1994), 7-9.

り、孤児や寡婦に対してもやはり善行や慈善の目的で利子付きで援助したりするのに使われていたということでした。換言すれば、宗教指導者たちは民衆に対しては利子を禁じる一方、ワクフの運営においてはじゃんじゃん利子をとっていたのであり、これを宗教的罪だと知りながらも、街区において、あるいは法廷において、自分たちが宗教(の教え)に反しているとは考えなかったのです。さて、宗教指導者たちはいったいこれをどのように行い、いかなる方法でこじつけていたのでしょうか？

たとえば、ある人が一年の期限で10リラ貸し、その一年の利子として一リラ取るとすると、そこへ家財や書物、あるいはポケットの中に持っていた時計を取り出して、「この時計を11リラで買いませんか？」と言います。買い手が「はい(、買います)！」と返事をするや、時計は直ちに買い手に渡されます。しかしその直後に、「この時計、私にくれませんか？」と(買い手は)問い返されるのです。そしてもちろん、時計はすぐさま債権者に返却されるのです。よって、年に一リラの利子で10リラ融資されたのではなく、あたかも11リラで時計が購入され、そのあとにそれを贈り物として求められることで、(債権者に)贈られるのです。こうして宗教指導者たちが「シャリーアの外装(フッレ)」と呼び、人々が的確に「シャリーアの脱法(ヒーレ)」と呼ぶのはこれなのです。なんとこのやり方でとられる利子は合法化されたようなのです。とはいえ、シャリーアと脱法が一体化されているとはなんともおかしなことではありませんか。

都市の建設、道路の敷設、商工業の発展、中央政府、陸海軍の増強のための資金調達の必要性を否定する人は、この時代にひとりもいないでしょう。そしてこうした目的のための資金も利子(付き融資)によってのみ調達されることもまた周知の事実であります。しかしそうであっ

ても、高利暴利がよいことだと主張する宗教や政治体制、政府がこの世界に存在することを想定してはいけません。新たな政治体制を敷いたドイツのヒトラーですら、20世紀という文明の世紀において、利子を廃止するか、あるいは無利子でなくとも無利子と感ぜられるくらい利子を下げた政策をとりました。(世界の)あらゆる政府が行っているように、トルコ共和国も利率の低減に努力していることを私たちは知っていますし目の当たりにしています。

そういうわけで、諸宗教のやろうとしていたことはこれなのです。キリスト教においてもその初期には利子は禁忌であると考えられていました。ユダヤ教が利子をどのようにとらえていたのかは私は知りません。彼らの宗教が利子を禁忌であるとしていたとしても、ユダヤ教徒たちはいつしかその禁忌を放棄してしまって、キリスト教世界やイスラーム世界で利子が禁忌とされていた時代に、ユダヤ教徒たちはこの仕事を引き受けたのです。これが、今日、世界中の金融組織がユダヤ教徒たちの手中にある理由なのです。イスラームも利子を扱っていたのか、あるいはこれを完全に、または部分的に禁じていたのかをここで議論しようとしているではありません。私がここで申し上げたかったのは、その適用方法についてであり、つまり、その方法がシャリーアに反しないように宗教的に適合されていたという点であります。共和国体制はこの「偽善」的やり方を廃止し、国営銀行を設立して国民資産を増やし、十年間で国富は六千万リラになりました。このことに私たちは感謝し喜ぶ次第です。

別の話題に移りましょう。

i

この事例をもっとこのようにお話ししていくこともできます。ですが、これ以上お話しするのは時間の差し障りもありますし、会議のテーマに

も適っておりません。ただこれだけ付け加えておきましょう。今日地方自治体によるもっとも明確な業務である清掃や照明業務でさえ、以前は個人の営為によって成し遂げられていました。たとえばみな家や店舗の前を掃き清め、ゴミを運んで海に棄てることや棄てさせる義務がありました。この難しさは理解されますように、ごく最近まで私的に、例えば清掃業務を自治体が引き受けた1896年までは、イスタンブルでは「ゴミ出し」組合という一群の人たちが現れて、多くの理由から誰もが自分ではおこなうことのできないこの業務を、金銭の対価を得て彼らがおこなっていました。老イスタンブルっ子であれば「ゴミ出しまーす」という呼び声をまだ記憶にとどめていますし、彼らのがらがら声の物まねをしたものです。

エヴリヤ・チェレビもゴミ長官、あるいは「浄化長官」について言及し、この組合の奇妙な格好から仕事の仕方まで、長々とした情報を伝えています³²。

ただベヤズィト広場のような公共空間は、月に二度、アトメイダヌ——今日のスルタンアフメト公園ですが——のようなもっと大きな所は年に二度、個人ではなく賦役割り当てと治安機関の強制によって、非ムスリムの人々や集団に清掃させておりました。この方法の善し悪しはここでは議論のテーマからは外れます。

照明に関して言えば、夜のヤトスの礼拝時間以降³³、通りにいることや外出することは古くから治安の観点からもっともきつく禁止された行為でした。緊急の必要のために外出したい者たちは、中に蠟燭を灯した提灯をもち、この方法で通り抜ける通りを個人で照明する義務があ

りました。言ってみれば、その当時、毎晩あちこちの通りではこのようにそれぞれ提灯行列がおこなわれていたのです。

石油やガス、電気がなかった昔には、照明とはこれ以外のものになりようがなかったのです。

この当時、もっとも多く発生した治安事件は次のようなものです。誰であれ、夜中に提灯をもたずに歩いているのを目撃されると、交番に連れてこられてそこで罰として朝まで釜焚き場で強制的に掃除をさせられて、朝早くから釜焚き場で汚れた汚い服で家に戻るよう通りに釈放されて人々のさらし者にされることでした。人々は通りで朝早くからこのような汚い格好の人を見かけると、そいつが夜中釜焚き場で過ごしたことを理解したものです。トルコ語でいうところの「キュルハンベイ külhanbeyi (釜焚きさん＝



【写真1】キュルハンベイの釜焚き エディルネのネジュミ・イイエ家民俗博物館

よた者)」という表現も、このさらし者の罰が与えられた時代のなごりなのです³⁴。

善行や同情、整備の目的でおこなわれた事業について語る際、この中でもとりわけ大きな位置を占めなければならない「橋」のことを忘

³² エヴリヤ・チェレビは、ゴミ長官の配下にあつたごみ収集人組合 (eşnaf-ı arayıciyan) が町中の名家や大通りに溜まったゴミを海岸まで運んでたらい (tekne) の中で洗い、銀貨やときには高価な宝石類を見つけて満足していたこと、股まである黒い長靴 (çizme) を履いていたことなどを伝えている。Evliya Çelebi, 1996: 221.

³³ イスラームの宗教的義務として定められた一日五回の礼拝のうち、日没後一時間半から二時間ほどに行われる礼拝。イシャー礼拝。

³⁴ この語源については諸説あり、もともとハマムの釜焚き場に住んでいた下層民がそう呼ばれるようになったとの説が有力。Uğur Göktaş, "Külhanbeyleri," *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi*, vol. 5 (İstanbul: Tarih Vakfı, 1994), 164-165.

れるわけにはいきません。大都市や町の中で、あるいは近所にある暴れ川の上を人間や家畜が疲れずに、おぼれずに快適に渡るのを保障してくれるこの偉業についてお話しせずにおくことは、善行を愛する者たちにとって、よいことでもすばらしいことでもありませんね。実際これは、道に歩道を作ることよりも大事です。なぜなら歩道のない道はそれでも歩けますが、水の上は簡単には渡れないからです。

イスラーム世界では「道から人々に苦痛を与える物事を取り除くのは、信仰の一部である」と人口に膾炙していたそうです。そうしますとこのすすめに従えば、とても信心深い者たちは国のあらゆるところで街道や歩道を作ったのと同じように、水の上を通る道に他ならない何百、いや何千もの大小の石造レンガ造の橋も作ったのでしょう。この橋の中のあるものは、ジェスリ(橋)・ムスタファ・パシャや、ジェスリ・エルゲネ、ウズンキョプリユ(長橋)のように、名前を



【写真2】ウズンキョプリユ橋

そこにある村に与えたものすらあります³⁵。橋が善行を目的として作られたことを立証するため

に、皆様にアナトリアやルメリ地方をかけずり回っていただくつもりはございません。1252年、つまり今からちょうど100年前の西暦1836年に、このまちで初めてガラタとイスタンブルを結ぶために作られた木製の橋ですら、政府やワクフ、あるいは自治体への歳入や税源としてではなく、民衆への奉仕と善行の目的で作られたのです。このことはリュトフユ史が、この「橋の建設目的が人々への無償の便宜供与であることにもとづいて、決して誰からも一アクチュエたりともとらず、無料で往来できることが布告され、その名は「慈善施設(ハイラート)」とよばれた」という逸話に示しています³⁶。ごく最近まで、イスタンブルを含む場所の橋で、通行料、踏み代、係船料などの名目で通行者から金を取り立てていたことは、その建造時当初にあった目的からはまったくかけ離れています。

すべてのこれら個人的営為に、ここで解説するには時間がかかる下水や歩道のようなその他の基本的自治体業務も付け加えて、これらもまた一定程度個人に作らせていたことを申し述べまして、本項の結語といたします。

* * *

個のシステムが、とりわけこの高等教育機関である(イスタンブル)大学の教授陣によって精査されるに値する価値あるものであることについては、講演の冒頭ですでに指摘したとおりです。どんなこともそれを正當に評価しなければいけませんから、本大学の歴代教授のひとりとしてトルコの大思想家、ズィヤ・ギョカルプがこの

³⁵ ジェスリ・ムスタファ・パシャ村は現在ブルガリア共和国スピレングラードのことで、16世紀に宰相チョバン・ムスタファ・パシャによって建造された橋が現存する。Yusuf Halaçoğlu, "Cisr-i Mustafa Paşa," *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol.8 (İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 1993), 33-34. ジェスリ・エルゲネとウズンキョプリユは15世紀前半に建造された同一の橋を意味し、トルコ共和国のウズンキョプリユのエルゲネ川に現存。

³⁶ Ahmed Lûtfi Efendi, *Vak'ânüvîs Ahmed Lûtfi Efendi Tarihi*, IV-V, ed. Yücel Demirel and Tamer Erdoğan (İstanbul: Yapı Kredi; Tarih Vakfı, 1999), 888-889. 「大橋建設」(İnşâ-i cisr-i kebîr-i deryâ)という見出しの下に、開通式などこの橋にまつわる逸話が記載されている。

テーマに関していくつかの著作を残していることを後に『小雑誌 *Küçük Mecmua*³⁷』で知りましたので、ここに追記しておく必要があります。

ギョカルプは、1918年にかけて『新雑誌 *Yeni Mecmua*³⁸』という雑誌に発表したいくつかの著作でこのテーマを社会学的観点から精査し、「個はなく、あるのは社会のみだ。君も私もなく、ただ我々が存在する」という格言を提示しました。すなわち彼は、西洋が進歩している理由はただ社会のおかげであり、一方我々が遅れているのは個に起因していると見て、個人の尽力とそれに依存した諸制度を批判し、「個」から「私」へ、最終的には「社会」へ移行すると提起したのです。

ギョカルプは個（のシステム）についてこのように明確な考えを示しているわけですが、個人の尽力による諸組織やワクフの仕組みを注意深く精査する時間はなかったのではないかと思います。もし精査する時間があつたとしたら、大思想家たる彼はこのようには言わなかったでしょう。実際、やはりこの時期のギョカルプがワクフについて抱いていた信念もほぼこれと同様で、頑ななものであつたことについては、後に詳細に述べたいと思います。

幸いギョカルプはずっとこのように考えていたわけではなく、調査研究を進めるにつれて個（のシステム）についての見方や理解も多少変化し、かなり深化させていたことが、1922年の『小雑誌 *Küçük Mecmua* (23号)』に「公共の精神 *Umumculuk*」というタイトルで出版された著作からわかります³⁹。その著作でギョカル

プいわく、

社会は個人から成り立っている。社会には脳も目も耳も手もないので、自分の利益について知ったり考えたりすることはできないし、利益になるようなことを自ら行うこともできない。社会の利益に対して害になることを知ったり考えたり、害を排除して利益をもたらそうと働きかけることができるのは、社会の構成員たる個人だけなのである。しかし、はたして個人みなが、ただ社会のために公共の仕事に尽力しているのであるか？

個人の生きかたに注目してみると、そのほとんどの人が単に自分のことだけに従事していることがわかる。公共のことにはまったく関心を示していない。たしかに個人が自分のことをきちんとやるのは社会にとっても有益であろう。しかし、個人的なことだけがなされるだけでは十分ではない。公共のこともきちんと不足なく行われなければならない。そこで、このような「個人主義」の人々のほかに、「公共的」な人々が必要となる。

1. ただ個人的利益のために公共のことに従事する人々。例えば給料を得たいだけの公務員、あるいは経済的利権をかつ攫うために国会議員になった者たち。
2. 見栄や自慢といった動機で政治的立場を切望する人。
3. 長職への固執や政治権力への執心を抱い

³⁷ ズィヤ・ギョカルプによって1922～23年に刊行された週刊の雑誌。ギョカルプ自身が筆を執った論考や収集した昔話などが大半を占める。Alim Kahraman, “Küçük Mecmua,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 26 (Ankara: Türkiye Diyanet Vakfı, 2002), 528–529.

³⁸ ズィヤ・ギョカルプが監修し、統一と進歩委員会 (İttihat ve Terakki Cemiyeti) の支援によって1917～18年に刊行された週刊の雑誌。Alim Kahraman, “Yeni Mecmua,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 43 (Ankara: Türkiye Diyanet Vakfı, 2013), 428–430. 同誌に掲載されたギョカルプの著作については、Ziya Gökalp, *Yeni Mecmua Yazıları*, ed. Salim Çonoğlu (İstanbul: Ötüken, 2018).

³⁹ Ziya Gökalp, “Umumculuk,” *Küçük Mecmua*, 33 (1341/1923): 1–3. 同雑誌の表紙に記載された号数は誤植により23号とあるが、実際には33号である。他の号数の誤植についてはKahraman, “Küçük Mecmua,” 529.

て政界に飛び込む人。

これら三種類の人物は、どれだけ公共の仕事に携わってしようとも、ただ社会の利益のために尽力しているわけではない。このような人たちの行動理念が個人的な貪欲に基づくものであることから、社会にとっての根本的な利益を無視して、ただ表面的な利益をもたらすだけにとどまってしまうのである。そこで、社会的利益に沿うかたちで公共の仕事が行われるために、これらとは別の種類の人間が必要になるわけです。それはどのような人間かというと、公共の仕事に多大な関心を示すような人でなければならないし、その関心というものが、個人的利益や社会的地位への執心や自慢といった感情に由来しないものでなければならない。この関心の源は、ただ国家、祖国、社会の理想たるべきなのである。すなわち、このような人間は、公共のことに対してまったくの無私・無欲であるべきで、個人的な願望を抱かず、対価を求めないものでなくてはならない。そういうわけで、このような徳性をそなえた人間が公共の仕事にたいして涵養した関心を、公共の精神 (umumculuk) と呼ぶのである。フランス人は *Esprit public* (公共の精神) という言葉をこの意味で使っている。

公共の精神は、社会的・政治的改革の根本となるものである。ある国において、公共の精神がなければ、そこでの諸改革から多くを期待すべきではないだろう。公共的な人物が多くいる国では独裁、圧政、反逆といったことは起こらないのだ。

西洋が東洋と違うところは、西洋の国々では公共の精神が強いことである。ムスリムの諸民族の中では、この徳性がとりわけトルコ人において強いことを私たちは見てきた。トルコ民族に確かな未来

があることは、トルコ人個々人のなかに強い公共の精神があるおかげなのである。そのおかげで今日、トルコ人は民主的組織を有する国民国家を創設することができたのだ。

ズィヤ・ギョカルプによる考察はここまでです。見解や考えの点では(私のものと)相違ありません。ただ、私が理解しながらも説明できなかった真実を、ズィヤ・ギョカルプは鋭い論理と優れた言い回しで学術的に提示しています。ただそれだけなのです。

最後に申し上げるとすれば、ズィヤ・ギョカルプは、公共の精神という語を与えているにもかかわらず、個人主義 (ferdiyetçilik) を擁護しているわけです。